



→喉もと過ぎれば……
…という言葉があるが、
この水から放射性物質
がどうやらこうやら、とい
う話題も、まるで無関係
のように、のどかだった。

↑正月三ヶ日とちがって、この時期の行
列は、なごやかだ。それに売店の売り上
げもあがる。

ゴールデンウィーク、正月三ヶ日以
来の行列ができた。ただし、五月四日
の一日だけだ、母の日日和だった八日
は、人出がまた元に戻った。

木陰で昼寝をしたくなるような、い
い天気につられて、ヤンキースおじさ
んが、やって来た。

おじさんの、いつもの口癖は、

「ここは混んでないから、一日すわっ
ていても、邪魔にならないし、あきな
い。人を見てるだけでおもしろいし、
話しを聞いているだけで楽しいんだ」

どうやらヤンキースおじさん、ゴー
ルデンウィークが終わりなので、もう
混まないだろうと、読んでやって来た
ようだ。読みはあたった。

ふるさとの

訛りなつかし 駐車場の

人ごみの中に そを聴きにゆく

そういえば、石川啄木は、こんな歌
を残している。ときどき啄木も、ヤン
キースおじさんのように上野駅にでか
けていたのだろうか。

上野駅には啄木の歌碑もある。

今週のクマ

→クマはご機嫌。ご主人は、おかしなやつだというが、お客さんたちにはもてもてだ。たいていの人が、「か～いい！」とってくれるのだ。



今年も矢切の渡しに、鯉のぼりが泳いだ。この日ばかりは日の丸も、はためかない。もちろん他意はない、念のため。

「ああ、あれは誰かのでっち上げだよ」
こともなげに、おじさんはいった。

東海の小島の磯の

という歌があるが、これも空想で詠まれた歌だと、おじさんはいう。

石川啄木の歌の多くは、フィクションなのだそうだ。つまり、創作。

「だいたいさ、人混みにもまれるようなところで、ふる里の言葉なんかまともに聞いてられるもんか」

ヤンキースおじさん、鼻をぴくつかせながら吐き捨てるようにいった。

だとしたら、かつて一時代、多くの幼気（いたいけ）な青少年たちの心をとらえたという意味では、詐欺師の歌といってもいいのか。

啄木は大うそつき？

「そうさ、大うそつき。文学なんかやってるやつは、うそつきじゃなきや……」
おじさん、なにをいいたいのだろう。
まさか、自分が文学を志していて、挫折した恨みでもあるのだろうか。

ふるさとの 訛りなくせし友と居て

モカ珈琲はかくまで苦し

寺山修司